

Turgot の歴史意識の構造と論理

——初期の諸論稿を中心として——

渡 辺 恭 彦

I はじめに 一問題の設定一

Turgot の歴史思想を研究対象としようとするとき、少なくとも次のような課題が考えられるであろう。第1には、彼の哲学思想や宗教に対する態度、あるいは経済理論や政治政策との関連はどうであったかを克明に検討すること。第2には、彼の歴史思想を、とりわけその《進歩の理念》を、XVIII世紀のフランスにおける啓蒙史学の中に位置づけて、その歴史認識や歴史的思考方法の特徴を明らかにするとともに、彼をも含めた十八世紀の人間の根本的特徴の一つであった啓蒙主義的オプティミズムの、歴史的・社会的根拠とその現実性を問うこと。第3には、そうした啓蒙主義的歴史観の歴史的展開の検討と評価の問題である。

第1の点についていえば、少なくとも Gustave Schelle による *Oeuvres de Turgot et les documents le concernant*, 5 volumes, 1913~1923¹⁾ の刊行以前には、資料的な制約もあって、この問題は殆ど研究の対象とはされず、Turgot 研究は、Du Pont や Daire に依拠して、もっぱら彼の経済理論および政治政策の解明と評価に集中されていた。しかし Schelle 刊行後もこの問題の研究の重要性を指摘したものは、筆者の知る限りでは、Douglas Dakin のもの²⁾を除いてはないようである。けれども Dakin の場合にも、Turgot の経済理論および政策の克明な実証研究という点ではすぐれているが、Turgot の歴史思想の生成・展開と経済理論の成立や政治政策の実践との微妙な関連の解明の点では十分とはいえないであろう。わが国における Turgot 研究には、この問題に触れたものはすでに若干みられるが³⁾、Turgot における歴史と理論と政策の構造連関の十全の解明の問題は、なお将来の課題に属するといわねばならないであろう。第2の点、すなわち Turgot の歴史思想の啓蒙史学の中への位置づけの問題に関しては、史学史的あるいは思想史的な観点から行なわれた多くのすぐれた研究がある⁴⁾が、しかし Turgot の歴史認識や歴史意識の生成の過

1) 以下文中のページ数は、この第1巻のページを示す。

2) Douglas Dakin; *Turgot and the Ancien Régime in France*, Methuen, London, 1939. Chap. XVlll.

3) 出口勇蔵「経済学と歴史意識」のうち「フランス啓蒙時代」, *Keiso Acadmic Library* 7, 1952年, 147~277頁; 津田内匠「Turgot の経済思想についての一考察」, 「経済研究」, 9巻4号, 1958年; 同訳「チュルゴ経済学著作集」, 一橋大学経済研究叢書 12, 1952年, 1~18頁。

4) その代表的なものとしては、次のものを挙げることができる。

Flint, R., *History of the Philosophy of History*, 1893, pp. 109~115; Bury, J. B., *The Idea of*

程や構造を明らかにしたり、殊にその進歩史観の根底に横たわる啓蒙主義的オプティミズムの歴史的・社会的根拠を究明するという点では、なお十分ではないように思われる。第3の啓蒙史観の歴史的発展とその現実性の検討の問題に関しては、第1次および第2次世界大戦後の政治的・経済的・社会的現実の中で、進歩の理念の欠陥や限界を十分意識しながらも、そのもっていた人間中心的性格や人類解放の意欲を積極的に再検討・再評価し、現代における《進歩》の新たな意味を問い、危機に立つ人間と人類の解放・存続の方途を見出そうと努力している人々¹⁾や、これに反して進歩の理念を批判し、少なくとも人類の未来に関しては、絶望と危機とから救いうる新たな《信仰》を確立しようと努力している人々²⁾などがみられる。

ところで筆者は、これまでの諸業績から学びつつ、上にのべた第1および第2の問題について検討したいと考えている。周知の如く、Turgot の歴史思想の中核をなしていたものは《人間精神の連続的進歩》の理念であり、彼はこの理念にもとづいて人類史の《普遍史》的叙述を企てた。筆者は、この理念と意図は、彼においては、初期の *étudiant* および *magistrat* としての時期(1746~1761年)の言語、哲学、宗教、歴史経済等々についての研究の中で醸成され、中期の *administrateur* (*Intendant de Limoges*) としての思索や実際政策(1761~1774年)のうちにも、さらにまた後期の *Contrôleur général des finances* としての政

History, 1920, New Dover Edition, 1955, Chap. VII, VIII.; ditto, *A History of Freedom of Thought*, 1913, 2nd Ed., 1952, Chap. VI.; Gooch, G.P., *History and Historians in the Nineteenth Century*, 1913, Rev. 2nd., 1952, pp. 1~13; Meinecke, F., *Die Entstehung des Historismus*, 1936, Neue Ausgabe, 1959, SS. 180~192; Laski, *The Rise of European Liberalism, An Essay in Interpretation*, 1936, 2nd impr., 1947, Chap. III; Hazard, P., *La Crise de la conscience européenne (1680~1715)*, Editions contemporaines, 1955, 3^e partie; ditto, *La Pensée européenne au XVIII^e siècle; De Montesquieu à Lessing*, 1946, Eng. trans., 1954, Book III; Collingwood, R. G., *The Idea of History*, 1946, 2nd Galaxy Printing, 1957, pp. 76~81; Cassirer, E., *Die Philosophie der Aufklärung*, 1933, Eng. trans., 1961, chap. IV; Löwith, K., *Meaning in History. The Theological Implications of the Philosophy of History*, 1942, pp. 92~103; Carl L. Becker, *The Heavenly City of the eighteenth Century Philosophers*, New Haven Edition, 1960, pp. 71~118.

なお、わが国における進歩史観の研究には次のものがある。

田辺寿利「十八世紀フランス社会学」,「日仏文化」, 新第一輯, 1930年; 同,「パスカルとフランス社会学——フランス社会学における l'idée de progrès の発展と現代的帰結」,「思想」, 98, 99, 102, 103号, 1930年; 阿閉吉男,「市民社会の系譜」のうち「進歩の観念」, 1950年; 上原専祿「歴史学序説」のうち第2部第3「社会発展の法則と類型」, 1958年; 岩根典夫「チュルゴー研究——『人間精神の哲学的展望』を中心として」,「商学論集」, 5巻2号, 1958年; 坂田太郎「進歩史観賞讃」,「一橋論叢」, 43巻6号, 1960年。

- 1) e. g. Sorel, G., *Les illusions du progrès*, 3^eéd., 1921; Frankel, Ch., *The Faith of Reason. The Idea of Progress in the Enlightenment*, 1948; Hobhouse, L. T., *Morals in Evolution*, 1951; Ginsberg, M., *The Idea of Progress. A Revaluation*, 1953; ditto, *Essays in Sociology and Social Philosophy*, volume. 2 Reason and Unreason, 1947, reprint, 1956, Chap. XIII~XVI; Sampson, R. V., *Progress in the Age of Reason. The Seventeenth Century to the Present Day*, 1956 (この内容については「一橋論叢」, 44号3年, 1960を参照)。
- 2) e. g. Dawson, Ch., *Progress and Religion*, 1929; Bergyaev, N., *The End of Our Time*, 1933; Niebuhr, R., *Faith and History*, 1949; Baillie, F., *The Belief in the Progress*, 1950。

治・経済政策の実践(1774~1776年)のうちにも、いろいろな形で継承されていったと考えるのであるが、筆者は単にこの理念や意図の内容や方法を説明するだけでなく、何故 Turgot がこうした理念や意図をもつに至ったか、またそれらは何を媒介としてどのように展開していったか、そしてそれらは彼にとってどのような意味をもっていたかの諸点を明らかにしたいと思うのである。そこで本稿では、ひとまず初期の諸論稿を中心として、Turgot の歴史認識や歴史意識あるいは歴史的思考方法の生成の経緯を検討し、その構造と論理を明らかにし、その妥当性を、とりわけその啓蒙主義的オプティミズムの歴史的・社会的根拠を問いたいと思うのである。

II Turgot における歴史意識の生成

Turgot の生い立ちに関しては、幸い Schelle の詳細な伝記¹⁾があるので、それに従って Turgot における歴史意識の生成の過程を、当時の生活意識の中にできる限り簡潔に跡づけてみたい。

1727年5月10日にパリで、旧貴族の3男として生れた Turgot の生涯は、当時の慣習に従って、聖職者となるための教育を受けることから始まった。10才のとき、College Duplessis、後の Collège Louis Le Grand に入学し、そこで修辞学までの課程を終え、ついで College de Bourgogne の高等科に進み、ここで humanités を十分学び精神を培った。16才で神学の研究を始め、première thèse に合格、1746年10月年令制限免除の特典を得て tentative の試験²⁾を受けることを許され、習年3月抜群の成績で合格し、bachelier en théologie となった。この成功を知って、パリの市長をしていたことのある彼の父は、再び年令制限免除の特典を得て licence の試験を受けさせようとしたが、この時は厳格な規定のために許されなかった。そのため Turgot は一時 Séminaire de Saint-Sulpice に入り、1749年10月 La Maison de Sorbonne に入学、翌年《修院長》prieur の名誉を与えられた。彼はこの間 l'abbé Turgot とよばれていたが、1751年の初め、聖職者となることを断念してソルボンヌを去り³⁾、以後司法官・行政官として現実の困難な諸問題の中で活躍した。

ところで Du Pont によれば、Turgot はこの勉学時代には《決して神学の研究にとらわれてはいなかった》(p.26)。彼は広く物理学、天文学、歴史学、経済学、文学、言語学等々に関心を抱き、《多くの言語で注意深く読》(ibid) み、Newton, Voltaire, Fontenelle を熱読した (pp.24~27)。彼はまた、当時のソルボンヌ (Faculté de théologie) の頑迷固陋な雰囲気にもかかわらず、この Maison de Sorbonne にあっては、《自由思想》opinions libérales の持主たちを師とし友人とした (p.21)。彼が尊敬した師には、夢想的なデカルト主義に反対してニュートン哲学の教授を主張した l'abbé Sigorgne とか、文学上の助言者で M^{me} de Pompadour を諷刺したり、1748年の講和条約締結直後に起った英国皇太子 Edward の強制国外

1) Schelle は 1909 年に Turgot の伝記 (1 巻) を書いたが、「Turgot 著作・資料集」(5 巻) を編集するに当って、第 3 巻を除く各巻の冒頭に詳細な伝記を付した。ここでは主として第 1 巻のそれに従った。なお、Du Pont de Nemours, *Mémoire sur la vie et la les ouvrages de M. Turgot, ministre d'Etat*, Philadelphia, 1782; Condorcet, *Vie de Turgot*, 1786. Eng. trans. (by Condorcet), London, 1789; Stephens, W. W., *The Life and Writings of Turgot*, London, 1895 を参照。

2) Voir. pp. 84~86.

3) Turgot がなぜ突然ソルボンヌを去ったかについてはいろいろな説がある。Schelle は、1750 年の父の死を契機にして、独立した生計を営まねばならなくなったことが動機ではないかといっているが、

退去事件をめぐり筆禍事件に問われたりした l'abbé Bon がおり、友人には、宗教的寛容や経済的自由を主張した Cicé, Boisgelin, Loménie de Brienne, Morellet, Véri らがいた。この時期の Turgot の知的関心は、1748年頃のものとは推定されている「著作予定表」Liste d'ouvrages à faire に示されている。実際それは、彼の歴史意識生成の過程を知るうえで重要な手懸りとなるものであり、そこにみられるまさに百科全書家的な知的関心は、啓蒙の世紀の中にあり啓蒙の世紀とともに生きんとする若き Turgot の生命の息吹きを示すものであった。そこにみられる約50のプランは、彼の全生涯の知的諸業績の要約ともいえるべきものであり、われわれは、彼の業績を検討する時、常にそれへと立戻ってそこに源泉を見出すのである。われわれの主題に限ってみても、われわれはこのリストの中から、この期の Turgot がすでに歴史を最大の関心事の一つとして、言語、哲学、宗教、道徳、地理、政治、経済等の側面から多面的・総合的に考察しようとしていたことを知ることができるのである (Voir. pp.115~116)。Turgot はこれより先1746年には、Diderot の *Pensées philosophiques* (1746) に対する見解を発表し¹⁾、Diderot をはじめとする懐疑主義や無神論の風潮を非難しながらも、他方自らは、《理性によってわれわれの神秘を証明する》(p.89) という Voltaire の Pascal 批判²⁾の立場に立って、カトリック側の不寛容や dogmatisme を批判した。そしてこの立場は、やがてソルボンヌでの第3試験 Sorboniques 開会の講演 Discours sur les avantages que l'établissement du christianisme a procurés au genre humain (1750年7月3日)(以下「第1講演」とよぶ)や、1753年および54年に、「百科全書」の最初の弾圧 (1752年2月7日)、《信仰強制告白》事件 Affaire des «billets de confession» (1752年)、同事件を巡るパリの Parlement の《大建言》Grondes Remontrances (1753年4月) およびParlement の追放と召還 (1753年5月~10月) といった一連の思想と信仰の自由を否定する事件の真只中におかれて、聖・俗両権の分離と市民的権利としての良心の自由とを静かに説いた2通の「寛容に関する書簡」Lettres à un grand vicaire sur la Tolérance の基本的立場となった。さらに Turgot は 1748年頃から Locke のそして恐らくは³⁾ Condillac の感覚哲学を受け入れ、1750年には Maupertuis, Abbadie, Malebranche, Berkley らの観念論的形而上学を批判した⁴⁾。そしてこの立場は、当時の彼の歴史研究や言語研究

もし Du Pont が伝えているように、Turgot がソルボンヌを去るに際して、「私には生涯自分の顔に仮面をつけていると誓うことはできない」といったとすれば、それはやはり彼の内面の問題でもあったと考えられる。もちろん勝手な推測は許されないが、筆者はやはりそれは、相当程度に Turgot の思想上の問題であり、現実との対決の問題ではなかったかと思う。See, pp.33~35, 236~238.

- 1) *Réflexions sur un livre intitulé : Pensées philosophiques*. なお、Diderot の *Pensées philosophiques* の critique や variantes については、Denis Diderot, *Pensées philosophiques*, Edition critique avec Introduction, notes et bibliographie par Robert Niklaus, 1957, Textes Littéraires Français を参照。
- 2) *Remarques sur les pensées de Pascal*, 1728 これは *Lettres philosophiques ou lettres anglaises* 1734に第25通として付け加えられた。
- 3) 「恐らくは」というのは、Turgot の書き物の中で Condillac の名が初めて現われるのは 1756 年の Etymologie および Existence だから。Locke の名はすでに「研究」の中にみられるが、Condillac についても、「著作予定表」に、Analyse de nos sensations et du langage, d'où principes de logique et de métaphysique universelle というような標題がみられるところからして、あるいは 1746 年の *Essai sur les connaissances humaines* をすでにみていたのではないと思われる。
- 4) 実際、1745 年頃から 48 年頃にかけての Turgot の書簡や断片的草稿を仔細に検討してみると、彼は一方で神学生として、「秘蹟」とか「恩寵」とか「神の存在」といった神学上のテーマを取扱いながら

の基本的方法として活用された。また 1748 年には、Locke や Montesquieu の貨幣論から影響をうけ、John Law の財政政策 *Le système* (1716~1720) の破綻に関連して「紙幣論」*Deuxième lettre à l'abbé de Cicé* を書き、経済問題について最初の書き物（未完）を残した。他方、Soisson のアカデミーが《技艺および諸科学における趣味の進歩と衰退の原因は常にいかなるものであるか》という課題で懸賞論文を募集したのを契機に、*Recherches sur les causes des progrès et de la décadence des sciences et des arts, ou Réflexions sur l'histoire des progrès de l'esprit humain*（以下「研究」とよぶ）という、断片的ではあるが後にのべるような意味できわめて重要な、歴史に関する最初の論文を残した。

前者の「紙幣論」は、1753~54 年の経済諸問題に関する論文や翻訳¹⁾を介して Turgot の政治経済思想の形成につながり、また後者の「研究」は、ソルボンヌでの第 3 試験閉会の講演 *Tableau philosophique des progrès successifs de l'esprit humain* (1750 年 12 月 11 日)（以下「第 2 講演」とよぶ）や、1751 年に Bossuet 批判を意図して書いたといわれる (p.274) 普遍史に関する二つの論文の草案、すなわち、*Plan du premier Discours sur la formation des gouvernements et le mélange des nations*（以下「第 1 論文草案」とよぶ）および *Plan du second Discours sur les progrès de l'esprit humain*（以下「第 2 論文草案」とよぶ）のうちの後者の基本的な考えをすでに示しているという意味で、共に重要な作品である。Turgot は 1751 年頃と推定される時期に、「政治地理学草案」*Plan d'un ouvrage sur la Géographie politique* という未完の草稿を残したが、この作品は普遍史と地理学と政治論のいわば総合的叙述を意図したものであり、同時に彼の政治経済思想生成の一つの重要なモメントとなっている点で、きわめて重要な作品である。さらに付言するならば、Turgot は同じ頃、こうした歴史研究と平行して、彼が歴史研究の一つの有力な方法として重視した言語の語原学的研究を進め、また歴史研究と言語研究に根底的基盤を与えた感覚哲学の研究をも熱心に行なっていた。そしてこれらの研究は、1756 年に「百科全書」第 6 巻に *Etymologie* および *Existence* という論題で発表された他、多くの断片的草稿の形で残された (Voir, pp.324~331, pp.340~345, pp.346~364)。

以上は、Turgot の *étudiant* としての時期 (1746~1751 年) の生活意識や問題関心の在り方を概観したものであるが、われわれの主題についていうならば、Turgot の歴史認識や歴史意識あるいは歴史的思考方法は、この時期に、Newton, Locke, Condillac, Voltaire, Fontenelle らの理神論や感覚論や科学論の影響のもとに、Descartes, Bossuet, Malebranche, Berkeley, Montesquieu, Diderot らを批判的媒介者とし、現実の政治や経済や社会の諸問題に触発されて、徐々に明確な輪郭を形成し、その展開の構えをとりつつあった、と考えてよいであろう。そこで次に、「研究」、「第 1 講演」、「第 2 講演」、「第 1 論文草案」、「第 2 論文草案」および「政治地理学草案」の 5 篇を中心とし、他の諸論文で適宜補足しつつ、Turgot の歴史思想の内容と構造を明らかにしたいと思う。

も、他方では、神や外界の事物の存在の確実性の根拠を「理性」や「感官の印象」に求めるという考えあるいは物理的世界を純粋に数学的、幾何学的に証明しようという考えを獲得しつつあったことが分る。そしてわれわれはここに、Turgot の神学的・形而上学的精神から理神論および感覚論への接近ないしは脱皮を読みとることができる。Voir. pp.82~83, 87~89, 106~107, 109~113.

- 1) これらの作品は、Turgot の政治的経済思想の萌芽を示すものとして、そしてその萌芽は、イギリスからの影響と現実の諸問題への接近の中で、著しく実際的な形で作られていったことを示すものとして、重要な作品となっている。

III Turgot の《普遍史》の内容と叙述方法

Turgot は 1748 年の「研究」では、《人間精神の進歩の歴史》を《諸科学・諸技芸の進歩と衰退の諸原因の研究》という方法のもとに考察しようとした。そして、1 学問・技芸の進歩・衰退の特殊的ならびに一般的諸原因 2 《趣味》の頹廃の原因 3 学芸・政治を担い指導してきた天才たちの役割 4 言語の形成・発達とその機能 5 人間精神の進歩に差違を生ぜしめる諸原因、等について、断片的にはあるがいくつかの重要な考えを明らかにした。

Turgot は 1 の点については、特殊的原因よりも一般的原因を重視し、進歩の条件を《民衆の言語の状態》、《政治組織》、《天才の偶然的出現》の三つに要約した (p.117)。

2 については、《趣味¹⁾》は純粹に道徳的な原因によって失なわれる。その純粹に道徳的な原因とは、国民の間にびまんした無気力と放逸の精神であり、半可通や文人に対する蔑視であり、王侯たちの奇異をてらった趣味である。王侯たちの暴政は趣味を墮落させる恐れがある》というように (p.119)、もっぱら文化的・社会的環境を重視した。

3 については、歴史の担い手として一方に天才の個人的・創造的役割を大きく評価する²⁾とともに (p.117)、他方とりわけ《機械技術》や《通商》の改良・発達については、天才の創造物を維持し効果あらしめるものとしての、また日常生活の《必要》besoins より発するところの《民衆》peuple の不断の創意の力に着目した (pp.118~119)。4 については、人間精神の生み出したものを保存し伝達することを可能ならしめ、あるいは天才を刺激してその才能を開花せしめる文字や言語の機能を強調した³⁾ (p.261~231)。

最後に 5 については、Dubos, Montesquieu らの主張する自然的原因の作用よりも道徳的・社会的原因の作用を重視し⁴⁾、環境と教育の力⁵⁾を強調した (pp.138~140)。

- 1) ここにいう《趣味》goût とは、学問、技芸、言語、風習に密接な関係をもつ人間の感性的な美的性向のことであって、Turgot はこれを、人間精神の重要な一要素とみなしているのである。当時、Montesquieu, Voltaire, Diderot ら多くの人々が、《天才》génie という言葉とともに、その性質や機能を論じていたが、Turgot はこれらの理想的体现者を《天才人》homme de génie とよぶのみで、それらの機能や性質については明確な見解を示していない。
- 2) しかし天才といえども、身体構造が多少すぐれている者にすぎないし、言語の状態や自由の気風といった、それが生れる《環境の偶然性》に支配されるので、その役割を過大視してはならない、という。Turgot は後に、《環境と人材次第で進歩の遅速に差があった》と、人類の進歩を、環境=制度・教育と人材=偶然的の協働とみるようになる。Voir. pp.117~118, 138~139, 302~304.
- 3) Turgot はここでは、文字や言語の人類の進歩に対する機能的関係を考えているのみで、その構造の感覚論的研究は行なってはいない。それは 1750 年の Maupertuis 批判を契機として行なわれるようになり、1756 年の Etymologie で集約的に示される。
- 4) かといって Turgot は、自然的原因の力を無視したわけではない。まず道徳的・社会的原因を探し求め、それが発見できない場合には自然的原因を考えよ、というのである。Voir. p.104, p.304.
- 5) 《環境》circonstances のうちでも、とくに文化的ならびに政治的環境を重視し、政治的環境については、自由、平和、勢力の均衡を強調した。ここには自由主義的・平和主義的思想とならんで、かなり現実主義的・国家主義的な考え方がみられる。Voir. pp.124, 131~132, 136, また、Turgot が、東洋とりわけシナの学問が、神秘主義やセクト主義や専制主義のために衰微し形骸化した、というとき、そこにはフランスの現実への批判がこめられていた。Turgot のシナ批判は、Voltaire や Quesnay と異なる点である。Voir. pp.124~125.

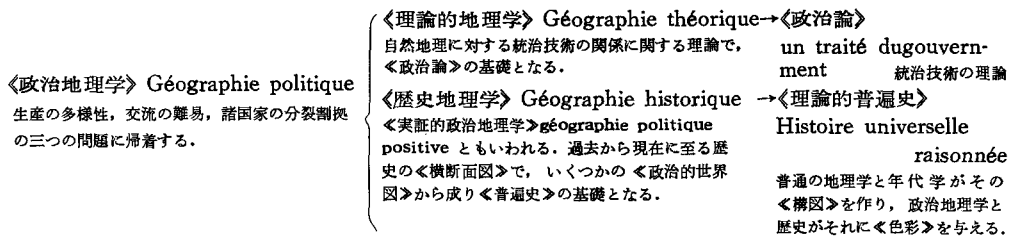
このように「研究」には、人間の歴史を巨視的かつ世俗的に、人類の歴史としてまた人間精神の歴史としてとらえようとする試み、文化的・社会的諸事象を相互連関的に把握しようとする努力、歴史は少数の天才のみによってではなく民衆一般によっても担われ形成されるのだという考え方、環境や教育の力つまり Samson のいう《制度》の力に対する信頼とそれによる人間改造の可能性への見通し等の鋭い着想が示されている。しかしそれはあくまで断片的にであって、それらを一つにまとめあげる理念はまだはっきりとは現われていない。1750 年の「第 1 講演」は、歴史における道德的要因とりわけ宗教の役割についての考えを展開したものである。Turgot はここで、キリスト教道德が人間と社会的・政治的諸制度の進歩・完成にいかに関与したかを事実即して証明しようとした。彼はこの第 1 部で《キリスト教以前の世界の奇妙な姿》と対比しつつ、キリスト教の確立以来それが《人間それ自体》の知的・道德的開明に対して行なった貢献を例示し、第 2 部で《法の中正と公平》および《立法者の權威》に対するキリスト教の寄与を例証しようとした (p.196)。しかし彼は、キリスト教を教義そのものによって評価しようとしたのではなくて、それがこれまでに演じてきた歴史的・社会的役割をその実践と効果に照らして公平に判定しようとしたのである。Turgot の真の意図は、キリスト教の道德の原理即ち愛と慈善の原理による人間の開明と社会的調和の実現を、歴史に照らして説くことであって、決して Bossuet 流の護教論を展開することではなかった。彼はキリスト教による《野心と情念》の抑制、《公正と穩健の精神》の実現を説くことによって、古代ローマの奴隷制度や社会的闘争からアメリカへの侵略、宗教戦争、専制政治、検閲制度に至る人類の犯した数々の野蛮な行為への冷静なしかしソルボンヌでの修院長としての立場からすればかなり大胆な批判を、意図していたように見受けられる。とくに彼が国王と人民の分裂を憂いて人民の自由と平等と幸福追求の権利を強調する時 (p.205)、人間解放の精神と人類意識が彼の歴史意識を支えていたことが知られる。

「第 2 講演」は 1748 年の「研究」を完成させたもので、Turgot はここで人間現象と自然現象の継起の仕方の相違を努めて明らかにしようとした。すなわち、前者は後者と異り、常に変らぬ単純な繰返しの方針には従わないで、《理性と情熱と自由》によって不断に新たな姿をとり、常により高度な完成へと向い、人類は、あたかも一人の人間と同様幼年期と成長期をもつが、決して老衰・死滅することのない《一個の巨大な全体》であることを、示そうとした (pp.214~215)。彼はここにおいて、「研究」においてと同様、人類の進歩の目印として文字と言語の完成、学問・技芸の発達、習俗 moeurs の醇化、政治諸制度の改善等を挙げたが、そればかりか、《人間精神の連続的進歩》ないしは《人類の無限の完成可能性》というきわめて樂觀的な基本理念をはっきりと示したのである。そしてこの理念は、Bossuet の《神の摂理の歴史》に対決しようとして試みた二つの論文の草案のなかで一層理論的な形で、しかも《人類史》の《普遍史》l'histoire universelle の敘述という形で再び取上げられることになる。すなわち、これらの草案では Turgot は、人間の知識や感情の根源は感性的觀念にあり、その觀念の不断の連繋が人類の歴史を構成するという想定 (pp.275~276, p.333) のもとに、《筆記術の発明》以来の歴史の因果関係を厳密に経験的・実証的にとらえようとした (p.337)。彼はまた、普遍史は《地理学》géographie と《年代学》chronologie に基礎をおくとのべている (p.277) が、これらは、人間の行動の根源にまた歴史の奥に、非経験的で超歴史的な神の意志の支配を認めようとする歴史の見方と記述方法¹⁾とに対決しようとするものであった。Turgot はまた、社会や

1) Bossuet, *Discours sur l'histoire universelle*, 1681. しかし Turgot は、Oraisons funèbres は éloquence の点で高く評価した。Voir.p.128.

国家の形成、政体の確立と人間の諸活動との関係を考察するが、そこでは類型的なものへの感覚が著しく示され、人類の歩みをいくつかの一般法則のもとに把握しようとする努力が強うかがわれる、たとえば彼は、人類のさまざまな活動の原動力の一つとして、環境と能力と所有の不平等に触発された《生活の必要》*besoins de vie* という人間の本源的衝動を重視し、これを基礎とした生産形態の発達に着目することによって、《歴史の時代》を《狩猟者の段階》、《遊牧者の段階》、《農耕者の段階》の三つの発展段階に区分したり、分業と交換の発生から《通商の精神》*esprit du commerce* によって内外の貿易が活潑に行なわれるに至る歴史的発展の過程を描こうとした (pp. 278~282)、さらに彼は、人類の経験してきたいくつかの統治形態について検討を加え、それらがいかに文明の段階と環境とに対応してきたか、また逆に文明に作用をおよぼしたかを示そうとした (『第1論文草案』p. 283 以下)、彼はまた、学芸の分化・発展の様相を歴史的に考察することによって Comte の《三段階の法則》を先取する考え方を示した (『第2論文草案』p. 305 以下)。かくして Turgot がここにおいて到達した結論は、《人類の総体は動と静、善と悪の交替によって不断に完成に向って歩んできた》(p. 285) という確信であった。

さて Turgot にとって、《人類史は人類の相つぐもろもろの進歩に関する考察およびこれらの進歩をうみだすのに寄与した諸原因に関する説明を含む》(p. 276) ものであった。しかるに人類現象は、必ず特定の場所と時期とを舞台として生起する。だから、《人類史は場所的ならびに時間的距離を明確にする地理学および年代学によって支援される》(p. 277) ことを必要とした。かくして彼は、人類史に対して補足的関係をもつ政治地理学を作り上げようとした。われわれはこの企てを「政治地理学草案」のなかにもみることができる。彼はその冒頭で政治地理学の一般概念を説明し、ついでそれを構成すべきいくつかの《政治的世界図》*mappemondes politiques* の対象と範囲を示した。彼にとっては、政治地理学はやがて《政治論》に発展すべきものであった (pp. 255~258) が、ここにその詳細のべることは不可能なので、彼の所論に従って普遍史と政治地理学と政治論の相互関係を図示するだけにとどめたい¹⁾。



この構想によって分るように、Turgot は人類事象を歴史的と地理的の両側面より、換言すれば、時間的と空間的、因果連関的と同時相関的、発展的と静止的の二つの側面から総合的に観察しようとしたのであり政治地理学によって普遍史の内容を一層豊富にし精密化しようとしたのだと考えられる。事実彼は、歴史における道徳的社会的原因の力を重視すると殆ど同等に自然的原因の力にも注目し、あるいは政治に対する宗教の関係を究明し、あるいは諸国家・諸民族の政体や経済組織の多様性に対する自然的環境の影響を明らかに

1) Voir. pp. 255~259. なお、1753 年ないし 54 年のものと推定されているもう一つの政治地理学に関する断片的草案 *Sur la Géographie politique* では、この「政治地理学草案」におけるよりも一層経済的な視点に立った構想を展開しようとした。Voir. pp. 436~441.

にしようとした。また彼は、諸帝国の興亡や英雄の出現よりも人類の経済的・政治的・文化的生活内容の変化、諸国家・諸民族の接触・融合 (*mélange*) による人類の連帯性の拡大ということに着眼して、人類の歴史を民衆の生活の歴史としてとらえようとしたのである。

これは、従来の歴史記述にみられた神中心の終末論的歴史観や偉人伝的な教訓的・実用主義的歴史観、あるいは逸話中心の物語的歴史記述に対して、政治や経済や文化を直接担う民衆の生活に、たとえ野卑素朴であっても理性や情熱やさまざまな欲望により歴史の根底においてその全般的動向を決定して行く民衆の生活に歴史の動因を見出すことによって、一個の巨大な全体としての人類の歩みを彼の時代に至るまでできるだけ現実にそくして、Turgot の言葉によれば《実証的》にとらえようとする試みであった。この試みは、不幸にして断片的な草稿のままに止ったが、もし完成していたら、ユニークな一大歴史叙述となっていたであろう。が、それはともかく、この「政治地理学草案」にあらわれた歴史認識とその記述の方法と構想こそは、この時期までに成熟をみた Turgot の歴史意識の構造と論理を示すものであったとみなしてよいであろう。つぎに、Turgot のこうした歴史意識の構造と論理について若干筆者の考えを示してみたいと思う。

IV 若干の理解と評価

Turgot が《進歩》という言葉を用いるとき、それは知識・経験の累積、学問・技芸の発達、政治制度の完成、道徳・習俗の醇化、人類の連帯性の拡大等を意味していた。これが彼にとって《進歩》の内容であり目印であった。いうまでもなくこの進歩の観念は、彼の独創ではなく、Bacon, Descartes, Pascal, Fontenelle ら XVII 世紀のエリートたちの遺産であった¹⁾。だがそこには問題意識の相違があった。すなわち XVII 世紀の知識人たちにとっての問題は、古代人に対する現代人の優劣を論ずることであり、現在に力点がおかれていたのに対して、Turgot にとっては——そして後の Condorcet²⁾にとってはさらに一層——あらゆる生活の担い手となっている人間を、全体として人類として把握し、過去から将来に至る人類の方向を探ることが問題であって、力点は未来におかれていたのである。

ではこの問題性の違いは何に由来するのであろうか。それはとりもなおさず、Turgot の啓蒙主義的オプティミズムの歴史的・社会的根拠を問うことになるのであるが、まず第 1 に XVII 世紀においては、現在を古代の権威 (スコラ哲学) から解放することが重大な問題であったのに対して、XVIII 世紀の啓蒙思想家たちにとっては、自然諸科学と機械技術の発達に対する著しい信頼とその将来の展望が問題であった。Turgot が Colomb, Galilée, Newton, Descartes, Leibniz, Locke らの天才にある点では批判しながらも敬意を表したのはそのためであった。第 2 に、人類の連帯性の拡大を進歩と見、その過程をできる限り広汎に描いて

1) 田辺氏は、Turgot に対する Pascal の影響とりわけ「真空論断片」*Fragment d'un Traite du Vide* (1647~1651?) の影響を指摘している。Turgot が Pascal を読んでいたことは事実だとしても、この「真空論断片」が Bossut によって初めて刊行されたのは 1779 年であるから、Turgot はこれを見ることはできなかったのではなからうか。筆者はむしろ、十七世紀に Charles Perrault や Fontenelle らによって広く展開された、いわゆる《現代人・古代人論争》の影響、とりわけ幼少の頃からその家庭に出入したり、その書物を愛読していたといわれる Fontenelle の影響が強かったのではないかと思う。Voir. pp.80, 104~105, 122~123, 339.

2) Condorcet, *L'Esquisse d'un tableau historique des progres de l'esprit humain*, 1794.

みたいという構想は、Hazard が指摘するように、XVII 世紀末から XVIII 世紀初頭にかけて旅行や貿易によって世界の接触が急速に拡大し、その多様性の認識が深まったこと¹⁾に由来するであろう。第 3 に、政治制度の改善や道徳・風習の醇化に対する啓蒙思想家たちの重視は、ルイ XIV 世死後の絶対王制の緩和と寛容の思想の漸次的滲透をさらに一層おしすすめたいという願望によるであろう。最後に、Turgot のオブティミズムのもう一つの歴史的・社会的根拠として、生産技術の導入・改善による農業およびマニュファクチュアの発達とそれらのブルジョワ的生産力の解放の可能性への見通しを挙げることができるであろう。これは、1757 年の「百科全書」への二つの寄稿論文 Foire および Fondation や 1759 年の Éloge de Vincent de Gournay にはっきりとあらわれている。

ともあれ XVIII 世紀の啓蒙思想家たちは、こうした時代の動きを敏感に感じながら、それを《人間精神の連続的進歩》あるいは《人類の無限の完成可能性》という理念にまとめあげたのである。したがってその理念は、彼らの時代からみた歴史の総括概念であると同時に彼らの思想と行動とを支える実践理念でもあった。それだからこそやがてそれは、知識人たちばかりでなく新興市民階級全体の指導理念ともなり得たのである。ところでこの理念には、人間の精神に対する、いいかえれば野心や情念や生の要求といった本能的衝動すらをも含む人間の理性に対する全巾の信頼がみられる。Turgot や Condorcet は、あらゆる時間と空間を貫徹する理性の普遍的法則を見出そうとしたのである。Montesquieu や Toussaint や Voltaire はむしろ逆に、さまざまな民族の制度や風習のなかに、環境の多様性に媒介されて普遍的理性＝人間精神がどのようなかたちで現われているかを探究しようとした²⁾。彼らはかつての神に対する信仰を理性に対する信仰によっておき代えようとしたのである。彼らは現実の非理性的な教会と絶対王制と対立したが、人間の理性に対する深い信頼からそれらの理性化すなわち宗教的寛容と啓蒙君主制とに期待をかけた³⁾。そして同時に、これが彼らの限界であった。Turgot は、なるほどしばしば《摂理》Providence の働きについてのべているが、それは神の直接の支配を意味するのではなくて、常に人間の精神を通じて働きかけ、人間のもろもろの行為を通じて働きかける自然法的な《見えざる手》のごときものであった。彼はそれにはなんら歴史の原動力を認めていない⁴⁾。彼にとって歴史の原動力は、人間精神というあくまで人間的・世俗的要素であって、摂理はその見えざる調節者にすぎなかった。しかし一面そのような調節者への信頼があったからこそ、人間精神の進歩・完成という普遍的で楽観的な歴史認識をもつことができたのだといえるであろう。やがて Turgot の中に開花する、私利の主張＝公益の実現という経済思想の根本理念も、そこから出てきたものであった。Turgot にとっても Voltaire にとっても、神は理性の産物であって、理性の全能を説明する手段となっていたのである。しかし Voltaire の理神論は、Newton 的に《自然》に対する驚異から出ていたのに

1) Hazard はこの傾向を《地理的精神の勝利》とよんでいる。La Crise de la conscience européenne (1680～1715), p.28.

2) Montesquieu, *Esprit des lois*. 1748 ; Francois Vincent Toussaint, *Moeurs*, 1748 ; Voltaire, *Essai sur les moeurs et l'esprit humain*. 1756.

3) その意味で、Turgot を含む啓蒙思想家たちの寛容論と、Bayle を中心とする十七世紀の libertins の寛容論および John Locke を中心とする十七世紀のイギリスのそれとを比較考察することは、重要な仕事であろう。

4) Bury は、Turgot の摂理への言及は、《慎重な空世辞》a prudent lip-service にすぎなかったといっている。Bury, 前掲書, p.154. しかし Turgot の場合には、単に戦術的なものではなかったであろう

対し、Turgot の場合にはいわば《人間精神》に対する驚異から出ていたという違いがあった、といえるであろう。Turgot はキリスト教の社会的《有用性》を認めたが、それはキリスト教を信仰として絶対視したのでも、教義としてのその卓越性を認めたのでもなく、それが道徳律として果した社会的役割を認めたにすぎなかった。彼はまた、法と習俗が理性によって改善・醇化されることを熱望し、それを人類の一つの進歩と考えた。そこにはすでに指摘したように《制度》に対する信頼がうかがわれる。そしてこの制度の力に対する信頼こそ、封建社会の諸矛盾の中で Turgot をしてやがて政治や経済の実際の改革者として立たしめ、Voltaire をして痛烈な宗教批判を行なわしめ、あるいは Diderot や D'Alembert をして *Encyclopédie* を刊行せしめた動機であったと考えられる。ともあれ Turgot の世界史像は、このような理性や制度に対する、そしてまた人間の善性に対する楽観的な信頼にもとづいて描かれたのである。

さて、思考方法としては、われわれはそこに、人間の知識や感情を、Locke—Cordillac の線にそって感覚や観念に分解してその発生の起源を問い、人間の諸制度をその発生の根源に遡ってその根拠を問うという経験主義的思考方法¹⁾と、さまざまな歴史的・人間的事象を理性の鏡に照らして取捨選択しその正当性を判断するという Descartes 以来の合理主義的思考方法とが、渾然と折衷されているのを見る。しかしながらこの折衷こそ、Turgot の《歴史》の性格をあいまいにした張本人であった。なぜなら、合理主義的思考方法が経験的・自然主義的思考方法を弱体化し、不徹底に終らせたからである。なるほど Turgot は、歴史を伝説や物語から切り離し、経験と事実とにもとづいて歴史を再構成し、できる限りリアルに歴史の因果関係を把握しようとした。彼はいたずらに過去を軽蔑したり、中世を暗黒時代視するようなことはなかった。彼は中世にも進歩を見出し、スコラ哲学者たちにも、哲学 (*sciences philosophiques*) の進歩に対する何程かの貢献を認めた (p.198)。彼はまた、人間の情念 (*passions*) とか野心 (*ambition*) とかの非合理的な要素をも、歴史の推進力として認める包容性を示した。彼はフランスの伝統ばかりかヨーロッパの伝統をも超えて、非ヨーロッパ世界にまで視野を拡げた。彼は聖書の中から歴史を引出したのではなく、聖書を歴史の中に一史料として押し込めた (p.278)。彼は 1756 年の *Etymologie* の中で、言語の語原学的研究は歴史研究の有力な方法であるとのべ、正しい語原発見のいくつかの基準を示した後、語原推定の《最も一般的な基準》は、《十分に疑うこと》であるとのべた (p.503)。にもかかわらず、彼の史料批判や事実批判は、むしろ Bayle や Montesquieu や Voltaire に劣っていた。

Turgot にあっては、人間の理性や知性に対するあまりにも強く楽観的な信頼のために、いうなれば啓蒙の世紀に生きんとするあまりにも強い使命感のために、そしてまた、自然法則にも似た厳密に法則的なものや典型的なものに対する感覚の方が現実的なものに対する感覚よりも強かったために、その歴史把握は十分にリアリズムに徹することなく、その歴史像は、科学としての歴史学ではなく、彼の理想から生じその理想を支えるところの一個の《哲学》にとどまった。彼は、歴史は結局のところ、理性的なものと非理性的なものとの、善と悪との二元論的な闘争であって、やがては理性的なもの、善なるものが打ち勝つであろうと考えたのである (p.285)。(そしてこの傾向は、Condorcet においては、自然科学に対する確固たる信頼によって一層強められ、彼においては、歴史は事実の歴史から、理想の歴史あるべき歴史にまで《哲学》化された。しかしそれだからこそ、大革命の最中に、歴史に学び、歴史の中に生き、歴史を信じて世を去ることが

1) この思考方法が最も明確な形で示されるのは、1756 年の「百科全書」寄稿論文 *Etymologie* および

できたのである¹⁾。Turgot は折角歴史における経済的要因や政治的要因の働きに着目しながら、それ自身の論理をもつ社会体制を把握することができず、また歴史における民衆の役割を認めながら、それ自身の多様性と自律性をもつ民族や階級として把握することができず、したがって、歴史をリアルかつ動態的ではなく、抽象的・直線的にとらえるだけに終わったのも、(歴史がまだそこまで進展していなかったといえはいるのだが)、彼自身の啓蒙主義的オプティミズムと自然法的合理主義の優越、すなわち経験主義の破綻のためであった。

もっとも Turgot の場合には、やがて政治や経済の実際問題にたずさわるようになると、かなりリアルな現実認識を行なうようになる。そして同じ自然法思想といっても、Quesnay はど固定的・静態的ではなく、相当に柔軟な形をとるようになり、《資本》というカテゴリーによって社会階級の分化と対立を把握するにまで至るが、結局は私有財産の容認を基礎とする自然法的合理主義から脱却することができなかった²⁾。経験的には社会階級の矛盾と対立を認識しながらも、その終局の解決を啓蒙君主制の中に求めなければならなかったのも、彼の主知主義的合理主義のためであった。その点で彼は、Rousseau や Mably や Babeuf の論理を欠いていた。また、彼が《歴史的》であろうとしたにもかかわらず、《非歴史的》、《反歴史的》で《皮相的》であったという非難を受けねばならない所以もここにあった³⁾。Turgot の歴史認識が、真にリアルな歴史認識となり、歴史の重みに耐えうるものとなるためには、何らかの形で経験のないしは唯物論的思考方法によって十分に濾過される必要があったのである。その意味で、若き日の Turgot の歴史認識や歴史意識が、その思考方法とともに、どのような形でその後の彼の思索と活動の中に継承され展開されて行くか、また Turgot を含めた啓蒙主義的合理主義的歴史観が、歴史自身の進展によってどのように克服されて行くか、はたしかに大きな興味の対象である。

(1962・7・14)

付記 本稿は先に大学へ提出した修士論文(1957年)および単位修得論文(1960年)の一部をまとめたものである。

Existence である。なお Existence については、Grimsley, R., Turgot's Article 'Existence' in the Encyclopédie (*The French Mind. Studies in honor of Gustave Rudler*, edited by Will More, Oxford, 1952) および、津田内匠「チュルゴにおける認識の問題」(「一橋論叢」, 43 巻6号, 1960年)を参照。

- 1) Condorcet, op. cit., とくに「第十期」。
- 2) Voir, Turgot, *Reflexions sur la formation et la distribution des richesses*, 1766.
- 3) フランス啓蒙史学に対する非難は、すでに Herder, *Auch eine Philosophie der Geschichte zur Bildung der Menschheit*. Beitrag zur vielen Beiträgen des Jahrhunderts, 1744 (Johann Gottfried Herder zur Philosophie der Geschichte. Eine Auswahl in zwei Bänden herausg. Wolfgang Harig, Aufbau, Berlin, 1952, 1er Band, SS. 443~527) にみられる。近くは、Collingwood, op. cit., p. 77.